



詠諧奧妙技折

上

^ 5  
4444  
1









花の咲身かろく草れ菊う菊 山田 勝造  
妹くく志りく蝶のふと我も 翁

梅核立給ひとさくさく

師の横むりく捨り木の家か ミノ大垣 塔山  
落りくくそわ乃髪此甲一 翁

雲をり結露子壺を夏世中次 如行  
古人くさうふ衣の来くくく 翁

我もさむよ安くり奥の菰接 イカ 雅良  
紫の湯子紗る音の元くく 翁

京鳴滝

赤う欄船割枇杷の廣茶ふ 京鳴滝 秋風  
篋くく動く山産れ茶 翁

梅をくく日永く横今歳日 湖春  
赤乃念の垂葉くくはく 翁

夏草よ東路満とく五日 若照  
笠してや花庭の卵花 翁

画讚

赤人も今一入り酒撥強 大ッ 珍碩  
土器人よ以公家の振舞 翁

龜行御の尻中はくまを  
よはし

えせやふ茄子をちまの鯛 京 惟然  
一そ茶飯やまゝしおく人夕魚 翁

物々や落葉の頂乃菊畑 十九 如風  
東士れ新やも手冬妻 翁

笑落葉をよき袖もほろひす 十コヤ 荷兮  
旅寝れおを足さるありと 翁

秋のふきりきたりくをむらりなる 江戸 木因  
萩や木やうらな秋よ森中より 翁

あつてんせもや羨望の因極嘆 巴百

心立あゝゝと母不破の子と雨 翁

春風や麦乃中行あり能音 木道寸

のり後ふいりむ志此糸に 翁

何とてよ唐を海行せふに 猿堆

雀の頭哉わくの粟れ種 翁

町白てや花まゝと残る松笠 大坂 翁

看るふ蝶哉とむる茗草 翁

榮種下き遠のちや夕涼之 曲水

榮迹行出さる以乃其真 翁

奥物こもなきて冬木の枯るふ 露川

小春より首乃動く葉むし 翁

新の軟うもそに能志孫とや 荷兮

打てや掃人庭能常木 翁

和らふ勢よと年の手作麦 如舟

田植をくもふ旅の朝起 翁

芽出しより二葉子茂る柿の實 ヲハリ 丈艸  
畠乃菘子のり、柿卯花 翁

*日暮田植をくもふ旅の朝起*  
翁奥陸く下くんと我々芽  
登極音伝多尚糸川乃  
何事か次川とくふあり  
泊竹をさくち送りぬ

雨晴く粟乃志さく孫えく分 桃雲  
いらきの叶より啼出る蟬 等躬  
夕食の残々外面尔月少くす 在在依  
秋来くくろく布あふかり 曾良



高久苗をり亭より

猿夜子苗よりけし世を食人 曾良

わさの乃堤河やえ折るささ 大世成

夏月此手袋のききうなりあて 等躬

○

おちり新ふおぬき

茨やうく遠習りか川を州 等躬

市の子位おきささ細布 曾良

日暮西尔差をなすあ涼きと 大世成

五

○ ちふりぬき奥刊

風の香も南にちり一宮上川 芭蕉

小糸糸粉をゆらふ夕くら 柳風

まのしかく林下ハ旁く埋まき 本端

○ 六月十日日出羽海田寺時

彦舟亭まで一吸奥刊

涼しきや浦へ入るおれ上川 大世成

月影ゆりなまを浪おれたる 剣直

思鴨の飛り度乃急明く 不玉

柿下ハ雨々々々々々々々々々  
皮とちの折敷作りて市紙ま  
かきゆくまかきく霜乃油火  
不様姫の公より重紀花くろも  
宜連 曾良 住曉 扇風

○酒田伊豆元明亭ホ抄あり  
江上之晚望

河川之山や吹浦くきて夕涼之  
海松菊磯くそ夢む帆柱  
月出ハ開屋を起く人酒持く  
土中の電乃くく秋風  
芭蕉 不玉 曾良 蕉

志ふくまわりく遺多る色松 玉  
何く世の玉を物く小菘若の毛 良  
香屋然く鴨飼の者く冬代集て 蕉  
火跡柿くけふふ松女くまきつ 玉  
海乃ハ道も亦く記まて切分たをめ 良  
松笠送る武隈乃古産 蕉  
草枕おきき患し志るくい 玉  
彼の神よりヤシの孫くしと 良  
清依くく何てあき我も思あく人 蕉  
比世乃きくくくくくく入 玉

新つゝ先妻帯寺に鐘の声  
 けふも命と寫乃を食  
 かけたるふし客あそ茶更折て  
 鐘乃地獄所 中 用  
 二  
 きのまを木蕙と寄る春の風  
 翁を瀧より流るふ山 姥  
 別力り流るのあたう笹傳ふ  
 棺 海をむく塚乃何と是  
 初雲はよりたれた岩を粧ゆ甘  
 恵比次代衣を縫ひく如流  
 良 蕉 玉 良 蕉 玉 良 蕉 玉 良 蕉 玉

明日志めん丁を俵り生居る  
 月さく清を陳中乃市  
 清樂ハ其葛々奥くか人入  
 小神袴伝送了戒乃師  
 我々奉の母小似するも床くく  
 賀とゆは是劣家の賣れて也  
 十  
 赤糸良れ京持傳ひる古々集  
 花小符を切ふ坊の酒藏  
 營の巢城たち初め母侍くひ  
 琴種うこきて第子にとる  
 玉 良 蕉 玉 良 蕉 玉 良 蕉 玉 良 蕉 玉



舞の後巻が打たる花びし海 栄  
 涅槃のつらみ舟を心氣の塔 水  
 二 穢多色ハ浮世の外の本富て 蕉  
 刀持まも甲斐乃一乱 良  
 中く起りし人心をくぬ算込 水  
 毛の書富の子割る松の本 栄  
 望まざる髪ハ心髪のかくを 良  
 集子権女乃名と菊の月 蕉  
 鹿笛尔啼ふもおろは古足詰 栄  
 此本奏子おろく家伝志く 水

旅少々嘆本徳を益のよをふて 蕉  
 多くかかぬ髪日乃あ子 良  
 古々の交うと跡をあり水り 水  
 云々切ふ編さるる紅の葉合 栄  
 雲三好く控所走の市はおろし 良  
 十 蝶掃の目跡軒尾乃窓 蕉  
 一人を古く懐恋ふかそくら 栄  
 嬌唇富かみはゆふ入相 水  
 乞く堤理を心紙面よ筆乃花 蕉  
 山田乃種を旅ふむる 良

おぢい伝承の亭々々々  
越吟あり

孫一や山嶽を生ねれ物筋子 翁  
蟬より車の音ゆゆる舟子 重行  
宿織の音いそぐを接舟と 曾良  
因縁生乃と流れ三ヶ月 呂丸  
春の影小あかりかたさ梨の花 行  
籠りり胡蝶や付一盡 翁

ウ  
山の端よはくくつり帆無舟 丸  
蘇ふたふと里を心とあつ次 良  
粟稗を日毎の舟子喰飽て 翁  
弓れ力減新ふ石乃戸 行  
赤櫻散母れ記念と種まき 良  
雀よ跡と小田乃刈初 丸  
以舞七門の板橋あまき今事 行  
救免くく浅くをりる月 蕉  
きぬくハ東る七同一古れ鐘 丸  
宿乃女忠如世をものう草 良

婿入の花んふ馬に赤短く  
 え乃廓き細く焼く  
 重銀持美志を赤に改る  
 赤糸の都りりさうふ始ふ  
 は音に先河くれとや谷河を  
 森を分りく小化糖美  
 遠くさ目流流を流筑紫舟  
 とふ丸くに友飯らとせそ  
 千日の危流むさふ小松り  
 船牛のうら流流流ふ流流

行 丸 箱 行 良 蕉 丸 良 行 丸

身ハ蟻のあふと夢や美は人  
 赤もくく赤丸ふ女節をふ  
 明る河舟を竹脚の舟に思く  
 温泉かきと湊奥此秋凡  
 くの丁のくふより思ふあのを  
 山やふ作ふさの遠方  
 尾衣男ふ海さか心  
 いかふふふふふふふ  
 花の町やととととととと  
 整りりりりりりりりり

丸 行 良 丸 翁 良 行 丸 翁 良 翁 良 丸 翁

新庄よむわく甚吟あり

清きりり家宿せ師一破齋  
くく免てのわふ風能董  
葉作嫩く落ゆらち流く  
旁きちかくと紅乃えさ  
ゆらたある月小ニ夕里備く  
馬市ききき弱速坊人

風流 芭蕉 孤松 曾良 柳風

妹けつる父り弓夫をさうり傳心  
草試く判 流定く可なり  
梅うり流之寸七下り流危瓶子  
笠をとりやきく流ささく  
之表さるる夢に古今の志りれ  
流乃ききく流也忠暮原  
高降く流松を巴と肥りたり  
流流志き流流乃素  
川亭く月を灯の小狂ふ  
疵流りんと流流くく

蕉流 良柳 如柳 木端 風柳 蕉松 端松





西黒山本坊亦相おつ無行

有強也雪依う初うて南谷  
まむかや人まむかふ家州  
川舟の総中常流引をうて  
鶴やん飛安とふんゆり三子舟  
澄あり天のうてふ餅乃重  
北北東ま衣う川あふ梨

芭蕉  
露丸  
曾良  
釣雪  
珠梅  
梨あ

居眠り一盞の日後ままはぬふて  
至里れ旅は来るれ牛道ひ  
山登まふり一城の紀を去ん  
父介持まむ世神本乃表  
取よこの流をふひ新宿るうて  
夏うまぬ表を何とまふ鬼  
古御所跡寺とあうる核は邊月  
系ゆたか枝れさむくやん秋  
月見すう引起されて眠り一ふ  
繁河ふうととととと物れ露

雪  
蕉  
丸  
良  
雪  
丸  
蕉  
水  
良  
蕉



饒別

志もやうく知小蟬啼山の音 本坊 會覺  
 松の志ききみをかつらるる月 をせ  
 弦かゝ系う管依篠よ抑當之 不玉  
 ちくあらしもれハ能似合たり 不白  
 ちくくよ言喰子家のじくうぬ 釣雪  
 偏七志と終り鳴くじくお フ

三島海ふよある管れ馬からて 巴百  
 入日あやくやく菽乃る人の木 玉  
 是うらの米依載く里社乐 、  
 始ちふまうと襟依はくらふ 百  
 待宵小枕香炉のからえんて 、  
 横川よ有れとふ中ねる 玉  
 降止と傘はさふぬぬ対向 、  
 八羽を牙懐 廿 怯 百  
 薄あうの下小雪詔をを記ぬ 、  
 暫く多紫粉を歩る立 玉

長山さきくみ子花あふ夢ん 百  
 河原おもてを流る物東風 玉  
 二 立河の流跡乃系の春り如 如行  
 志しくくおろを酒樽の履 支考  
 六きぬは紫と千ち次六月尔 行  
 子の遠くは猪持ての皇 考  
 小層負小園惠の四を流きの夕 行  
 いもく一の名流き了いさこい 考  
 雲天降る度目の門乃唐交居 行  
 あり流あさむら蛤若心 考

下帯れ跡のさふき裸身り 行  
 あり母坂より一姉りやふ 行  
 未拈の夕本よ月影流り多り 行  
 浮やうきた饒民の湯年 考  
 日雀啼か龜れ目毎乃おおひ 考  
 木のさふらとさぬの遠月の子 行  
 行る物子息坊之の屋つまごん 考  
 灯火の了ふ霞乃庚甲 考  
 初志くく河れ通をかり持く 行  
 産遠小比戸の線流屋 考

誠後国高田の医師  
細川素庵亭より書

茶園下り山を乃ふを州控  
森れ公庵を河平うりる丸  
炸きむ上の夕ア秋のふせ  
馬系れをて言義乃下  
曾良

馬川一吸りて  
さふまをいそく

加賀園北枝亭尔御を爲て  
名残乃遊以共

馬りりて乙鳥退行りくれうた  
花野乱るうふ乃始り目  
月よりやお換子袴ふみ入る  
鞘をりてとあく申のて苗くり  
青潤りり糺れみぬく  
柴蒔たのを峯れ世まら  
蕉  
良  
枝  
曾良  
丘枝

霰降る在れ心そ菅の寺  
 枝女中五人田舎わくくひ  
 房虫に恋しそ君は名もあらず  
 髪を剃りて子と魚食ぬゆり  
 蓮花いもさかしく花あり  
 先祖の笑を傳へそ家門  
 有明の糸乃とをうくそあや  
 戸海師の掃獵の弓并  
 秋風と女の云ぬ子も個あはく  
 心そ枝乃はくそ草莽に  
 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝

花の香ハ古ふ都乃所伝り  
 妻を殘さか玄仍乃宮  
 長閑さあそく難波の貝屋  
 銀の小襦袢出す芥子焼  
 手枕子志とねの埃とくら拂ひ  
 美しかきく歌く五反屋  
 けき小袖薰賣れ古風あり  
 非蔭人なる人か心柔細  
 鳴心と川巻にまてし淋しゆ  
 衣しはくふそ日月のさゆ  
 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝 蕉 良 枝





伊波屋々湯本の峯も迷ふ家 芥ト  
 下戸に描くまゝく重紙酒樽 唐生  
 紫竹青よ緋雪ちきれり 李邑  
 道の地 藤子抱くまや 祝二  
 喚鐘りり鳥乃声も啼すや 夕市  
 交成さくむ家 宰樂乃舟 蕉  
 肌の衣女乃如ありとあり 格  
 舟 益師いづく我うづ 澹  
 赤ううらふ未より鳴あを蝶の声 枝  
 雷と鼓塔乃如とあり 良

昔中 伝説を竹乃柱も云四本 子  
 輕露清く 跡に 朔 息 邑  
 二 夜もまわく空小ハ声の如き筑あふ 市  
 びうをまふ月の清凌 卜  
 ちりかふふ心よ柔撫里をふ 生  
 皴ある翁道 菊を執 主

伊波屋々湯本の峯も迷ふ家 芥ト  
 下戸に描くまゝく重紙酒樽 唐生  
 紫竹青よ緋雪ちきれり 李邑  
 道の地 藤子抱くまや 祝二  
 喚鐘りり鳥乃声も啼すや 夕市  
 交成さくむ家 宰樂乃舟 蕉  
 肌の衣女乃如ありとあり 格  
 舟 益師いづく我うづ 澹  
 赤ううらふ未より鳴あを蝶の声 枝  
 雷と鼓塔乃如とあり 良

支考遠擡の志何りて是も小送る

小川乃算子又西遊といのれり 其角

之録に辛未年四月

是も小於備列乃擡を借去

飯館の鏡を門より部つか 其角

色の書付て團扇忘まら次 支考

細小裳袖もきりまぬ奥深小 枕隣

行に河川系橋乃春に 角

月乃東庭に西臥をふくま 考

角力を尚すと村れ行前者 隣

所々の秋通手歌と軽むかり 角

本名志ぬ依借世の友 一

舞袴も人せもなるる居り御 隣

三度一とほふか江戸橋の藝 角

ほやくと雨のむらうれ石尾 考

さやりのまといり角むま豆 隣

藤了したそ病をけりりなり 角

女客も冬内り一掃ぬと魚 考

照月小孫宜の代務のくハ由り 隣

新羅れ使舟漁家者一 角

貊島のそと舟ふたの柳川より  
其明け継子ハ止れ替り  
五冬十一何あるも此春の風  
産飯とふら待合せり  
髪板を掛捨たふ暮遠  
洗濯のちる紙衣とふら  
傾城と娘くたをむま  
洞小をらむ寄れ立牽  
盗りもはくそむ雨の舟  
舟やの麻れきく控ハせ

考 隣 考 角 考 隣 考 角 考 隣 考 角 考 隣 考 角 考

蓮の葉ハ佛のふら雅ちるん  
形もよ後一福のおくふ  
伴物系り懈一ちりにさりゆて  
こりりはさく魚打いやき  
戸控やはくく又ちる綱の尾  
くふ心ゆぬ佐土の掛より  
撰集抄新術の程とふくさきて  
肉の志はると女儀世一徳  
花移る初のみ乃美一き  
歳号代せりふ象沼の春

考 隣 考 角 考 隣 考 角 考 隣 考 角 考 隣 考 角 考

行そけ碎く涼し磯乃心  
くくそ雨し一鳴糸古鳥  
小麦新粒の中片一青也きく  
傘を本小四五人共の客  
月邊一羽織の上乃きくの帯  
勢柿の落く喜れひちるふ

野盤子

支考

重行

呂丸

考

行

丸

烏  
高町而賀名む便りの待客し  
俵ふりやまを又きくく髪  
獨寐の姉巻くく引くく交  
猫若通ひとぬ糸かくかみ  
扱穀れ白ひぶ野ふ吹ちりそ  
仲乃くくより障りあまる雨  
食仕舞ふ味唾の若れ捨れれ  
先足くくたふか織の織出し  
門前の隣をいすく定満くま  
月より一殿をくく立てりけ派

考

行

丸

考

行

丸

考

行

丸

考





六七騎 花は扇 月のは玉 裳  
 夕日のとこのふ 鮎 輪 々々  
 東風 海は琉球 表 新々々々  
 切ち 如く 多ふ 小回 此 多々  
 海ま しくくるの せりぬる 本津の 舟  
 此 僧 乃 新々 小 登々 して 来る  
 細長 花 紙 帳 小 雨の 漏 出 して  
 よの やと 粧む くらき くの 悪  
 味 嚼 豆と 粒 不 行 小 此 物 おもひ  
 々々の 佛 小 此 とも ぬ 々々 ね

玉 文 考 九 玉 撒 丸 考 文 撒

山茶花のうき 紅 色に 香ふりて  
 宰府 せり 小 ころ ころ ころ 人  
 後の 立 花 着 ぬき ころ ころ 月  
 鼓 廿の 鐘 小 世 秋の け 色 々  
 落 粟の本 此 糸の こと あり ころ ころ  
 風 々々 吹く 々々 蛇 甚 衣  
 ころ 淋々 ち 伐 切 小 舟の中  
 筒 御 板 小 ころ ころ 法師 等  
 横 小 此 扇 小 花の 咲の ころ ころ  
 ころ ころ 立 香る 麝 虎 枝 叶

玉 九 考 文 撒 丸 考 文 撒

河豚らうく志る心のうくふ  
 火桶の鶴接らうく  
 目小あくぬ垣子の夢と搔きあう  
 月よりうけらうくこの丸は初  
 まきとらうく佩へハあふ秋の春  
 是本たうかり見ゆるを旁  
 不玉  
 御通

廿九日

雨漏ぬ櫓のりり些許るれ  
 後を控し大年乃言  
 神鳴魚の籠子管懸出羽の若  
 中るまふ子の屋つまらるり  
 夕魚のいら咲ても美ふあは  
 床よりうくあうおまあねハ  
 美鴨のあう物も様うめく  
 直此頃行経あ乃付  
 舟寮くく船ハ名く可作春の月  
 嵐の松よくあ草のうく  
 玉、通、玉、通、玉、通、玉、通



獨りく暁月暮るん花さかり  
 かひりありと秋正月の候  
 二 嘗の啼ハ涼世の何うよ交  
 舟れ雲の夕も是を  
 懐切の極憂る時ハ嬉しく  
 星れ情多刀さす人  
 啼ましく登ふ間ハ葉や心か  
 色の影より美身猫  
 三 月小男世帯のまけかして  
 一 花もまくと泣きける何ま酒  
 通 玉 通 玉 通 玉 通

花咲く雨垣の本れまうくと  
 己未末て窓一西行の杖  
 有難や津波の舍利と抱む時  
 雨く新しき後世にまうくと  
 雨是出ふ憐れは雨の私情  
 短鶏啼然乃鬼の副  
 此とくくは湯門の叔れ務是く  
 色の秋落ま音のおうしき  
 かし元を系何くともる花の心  
 玉 通 玉 通 玉 通 玉 通

初雪のふかき付く産孫ふ  
有明多紀高き如のうら  
教の鳴か雷共掛子たふさそ  
波瀾町の舞しう里りり  
さふ侍隣ふ草鞋造れあり  
本吹通ふそ風の涼しき

尾花沢

清風

支考

不玉

風

考

玉

作ウるウ十個の搦小徑ウまて  
色糸白さほく月乃髪  
大小のうふととむ若此月  
七又忠夜を急のキメ梨ナシ  
玉章と襟より現く井の神  
白ふ紙酒か人うさふし  
行うぬ身ウ河ウ六緒せよき歌心  
う川まウくウ雨の降りつ  
川中小千費ウりウ車  
空戸ウ免ウりウ此古普代家あり

風

考

玉

風

考

玉

風

考

玉

風

後志より 秋の晩に 菜漢の  
小倉の 峯と 帰る かりて  
傾城乃 舟を かくる 月  
かや 露 蓮の 影を 人  
水 粉 烟の 影を 盛と 小なり  
浪 連 冠と 免ぬ 穿れ 屋  
いと 考 天 候 不 び 雲 以 強 け て  
のり 是 ぬ 中 以 貫 不 居 風 呂  
基 津 び 所 走 の 古 日 何 ぞ ち り  
お け り 一 二 掃 お ら ず 埃  
考 風 玉 考 風 玉 考 風 玉 考 風 玉 考

み人お 律 義 に 秋 と 寒 多 なる  
何 たる 也 たる 奥 の 津 瑞 璃  
本 蓮 の 影 多 なる 免 ぬ 夏 雨  
かき 名 候 若 び 不 立 なる 是  
秋 かく 秋 意 と 法 々 け け け 一 舟  
海 馬 と 中 なる 何 や 不 不 不 不  
花 の 意 意 意 の 寺 七 不 思 義  
空 倉 満 なる 八 倉 八 何 なる 米  
何 事 ぞ 拍 子 なる 自 の 雛 子 此 智  
紫 黒 の 蔭 なる 雀 花 なる 玉  
考 風 玉 考 風 玉 考 風 玉 考 風 玉 考

秋まきくテ風辛き雨系この分  
及肩  
後居ふましく戸成るる月  
珍碩  
早稲葉とまきり仕也ハ用七分  
之道  
人そくまあつたの放ト呼  
昌房  
張棚のまきしく見ゆ田舎梳  
正秀  
かかまはるねはくらの風  
抑志

畚さけく舟のこけくど捨あへん  
碩  
たまき子路の髪七きそ子に  
道  
居かふ雑炊時の夕るる色  
房  
神鳴杉の娘うそ中矣  
秀  
掛ておく合母れをり出せ  
道  
肌多しく博奕をり終る  
碩  
月の前酒小せりききとうけ  
秀  
茶成葉ふりく寺の雀人  
志  
上張り鶏益む向れこの事  
房  
日和りむきく糸の乾明  
肩

年くくと縁板ぬくふ花盛り 碩  
荷ひはきき新巻の入付 道  
幅廣き砂川流る長雨さよ 志  
羽織おろゆる傳集りあり 肩  
けしき朝起かぬふ五六日 道  
茶を体む喰ふもの何し 秀  
母親の仕立よく見せる娘入夜忌 秀  
悉くさしおろす檀那ふ出 房  
江戸店と持く在所の門口まで 碩  
妻と並んで喜ぶ間のおきき 道

役引の弓と巻くせくらぬく 志  
宵の小雨にまいた竹生さふ 肩  
あやうく圍の仔細を漏る月小 秀  
ふと告ふ秋の知よ鳥 肩  
ふ細の束縛を流く風乃喜 菊  
石地のはたと啼らすや坊 碩  
情はよ飛井のまじ吐して 道  
款と跡す奈言は借上 肩  
聖の廣き身の花と挿ひらけ 秀  
かふくくとさうあはれあふの 碩

Handwritten text in a rectangular frame, consisting of approximately 10 vertical columns of characters in a cursive script. The text is mostly faded and difficult to read.

休矣



